

アガトン・サックスと ダイヤモンド^{どろ}^{ほう}泥棒たち

ニルス・オルフ・フランセン 山岡 武 訳



評論社

NDC 949

168p

188mm×128mm

児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第852070号 登録許可済

名探偵アガトン・サックス Ⅰ
児童図書館 文学の部屋 アガトン・サックスとダイヤモンド泥棒たち

昭和56年8月30日 初版発行

定価 980円

訳 者 山 岡 武

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 評論社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

<検印省略>

アガトン・サックスとダイヤモンド泥棒^{どろぼう}たち

ニルス・オルフ・フランセン

山岡 武 訳

AGATON SAX OCH DE
SLIPADE DIAMANTTJUVARNA

by

Nils-Olof Franzén

© Nils-Olof Franzén 1959

Japanese translation rights arranged with
Albert Bonniers Förlag, Stockholm through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

アガトン・サックスとダイヤモンド泥棒たち／目次

1 正真正銘しょうしんしょうめいほんとのほんと 9

2 秘密指令ひみつしれい 23

3 アントンソン警部けいぶのりだす 35

4 アガトン、泥棒どろぼうたちの本拠地ほんきょちにのりこむ 46

5 泥棒たちの会合 56

6 ニセ者あらわる 67

7 スコットランド・ヤードのりだす 79

14	ニセ者の正体	154
13	さめたおかゆも使いよう	144
12	コー・ミ・ノールのダイヤモンド	131
11	マチルダおばさんの大活躍	121
10	バイコピング小学校の開校記念祭	108
9	最後の秘密指令	98
8	劇的な会見	84

アガトン・サックスとダイヤモンド泥棒たち



1 正真正銘ほんとのほんと

一九五九年六月六日の土曜日、午後三時のこと。バイコピング・ポスト紙の編集長であるアガトン・サックスは、編集室の椅子に、座っていた。太陽は明るく輝き、この小さな町は、平和そのものであった。そして、この町を大きくゆさぶる、恐ろしい事件が起きようとしているとは、だれ一人、考えてもいなかった。もちろん、アントンソン警部と、その仲間達でさえも。

アガトン・サックスは、ゆったりとくつろいで、土曜日用のパイプにタバコの葉をつめ、火をつけた。煙の輪を一つ、二つ、上手に、つくった。煙の輪は、マチルダおばさんの作った花柄のカーテンの方へ、ゆっくりとうかんでいった。

バイコピング・ポスト紙は、とても優秀な新聞として有名であつた。郵便局の広告揭示板にある宣伝文句も、まさにその通りで、その文句は、

バイコピング・ポスト紙

ニュースは迅速！

小さいけれども

最高級！

と書いてあつた。

この編集長の注意深い目は、重要なニュースを何一つ見逃さない。彼は、いつも、届いた電報の全部に目を通すことにしていた。その中には、今日のように、アントンソン警部けいぶからのものもある。次のタイプされた電文は、今日の十一時十五分に、アントンソン警部の、十二歳になる息子が、アガトン・サックスに持って来たものである。

「バイコピング警察けいさつ（アントンソン）は、昨夜九時、ソフィア・アルムグレン小間物店に、ショウ

ウィンドウを破って押し入り、木綿の反物を盗もうとした、二人組の男を、搜索中である。犯人のうち、一人の男の身長は、標準以下で、小さく、もう一人は、それより背が高い。一人は、もう一方より足が速くて髪は金髪である。二人とも鼻はまっすぐで、一人の男には、小さなイボがある。」

アガトン・サックスは、この通知をじれったそうに見、読みおわるとゴミ箱にほうりこんだ。そして、事務所の屋上にあがって、ヘルメスのエンジンを使った。この、長距離を高速で飛ぶことのできるヘリコプターは、西ヨーロッパ警察協会から、去年の冬に贈られたばかりのものである。ヘリコプターは、屋上から空中へ、垂直に舞い上がった。あたりをしばらく旋回して、教会の風見鶏のフレデリックのまわりをぐるりとまわると、川へ向って降りていった。川で釣りをしている金物屋のネイルズに、山高帽をとってあいさつをして、また、上へ昇りはじめた。二百フィートほどの高さまであがり、今度は、西に進路をとって、森へ向った。森に近づく、四分ほどヘリコプターをとめて、森の中をじっと見すかした。それから、引き返して、もとの屋上にもどって着陸すると、事務室から、アントンソン警部に電話をかけた。

「すべて解決しました。すぐにやつらを逮捕してください。」とアガトンは言った。

「どこで？ いつ？ だれだって？」とアントンソン警部がきき返した。

「森の中です。今すぐ。泥棒たちですよ。」

「森の中だって？ 『手中の一羽のほうが、藪の中の二羽より大事』 っていうじゃないか。」と、諺の好きなアントンソン警部が言った。

「森の中の二人のほうが、牢屋の中に一人も捕まえないよりましでしょうよ。」と、アガトン・サックスは、きげんを悪くして答えた。「丸い石から十八ヤードほど森の中を行ったところです。やつらは眠ってますよ。二人とも鼻にイボがありましたからね。」

それから三時間もすると、次の月曜に出す新聞は、もうすっかり準備ができて、印刷をまっぴかりになっていた。アガトン・サックスは、満足げに、土曜日用のパイプをふかし、すべては静かで平和そのものであった。

その時突然、かれの後ろの壁から、金切り声がきこえた。

「もう五時十五分よ、アガトン！」

アガトン・サックスは、スコットランド・ヤードから贈られた防弾腕時計に目をやると、

壁に向って答えた。

「すぐに行きますよ。今行くところです。」

「十五分も遅刻ちこくですよ。」と壁が言った。

「一分の狂くるいもなく正確になんて、できませんよ。」とアガトン・サックスは、言いわけをした。

「とんでもない！」ピシャリと、壁が、はねつけた。「私わたしはいつだって、時間には正確ですからね！」

アガトン・サックスは、小さくため息をついて立ちあがり、階下へ降りていった。

下の大きな部屋には、テーブルに二人分のコーヒーが用意され、そのそばに、マチルダおばさんが立っていた。

「今日、二時から三時の間、通話器を切っていたじゃないの。」と、おばさんは、非難ひなんがましく言った。

「ええ、おばさん。重要な仕事があったものですから。」

「私は、六回も話しかけようとしたんですよ、それなのにあなたったら、きこうともしない

んですからね！」

「すみません、おばさん。でも、薬のことなら、時間どおりに飲みましたよ。」

「そうそう、あなたに、新しい薬を買ってあるの。ヘパフォサミナルカディオンコントロリンフェルマトロンメノメナル錠^{じょう}。今度のは、カリウムフォスモリンスタミンヒストファノラルサリシラテノン錠より、ずっと小さいんですよ。」

「ありがとうございます。おばさん。」アガトン・サックスは、ゆっくりコーヒーを飲んだ。

「でも、さっきあなたが通話器を切っていた時、お薬のことを言おうとしたわけじゃあなかったのよ。」マチルダおばさんは、そう言って、自分のカップに、もう一ぱい、コーヒーをついだ。

「ちがうんですか？」

「ちがいますとも。」

「それでは、何だったんですか？」

「これですよ」

「何ですそれは？」



「速達ですけどね、犯罪者か何かからきたのにちがいないわ。」そう言って、マチルダおばさんは、アガトン・サックスに、外国切手がたくさんはってある手紙を差し出した。

「毒がぬってあるかもしれないわね。」と言うと、おばさんは、念のため、エプロンで、両手をふいた。

「いつ届いたんでしょう？」

「二時十五分でしたね。こんなふうな、不正な陰謀は、私は好みませんね。」とかの女は甥を、厳しい目でにらんだ。

「不正な陰謀？」と、かれは、叔母のほうへ向き直ってきき返した。